

地域社会における消防団の意識と役割に関する研究 ～世界遺産地域の白川村荻町地区の事例から～

Study on Roles and Awareness of Fire Volunteer in the Local Community : Case Study of the World Heritage Site of Ogimachi district in Shirakawa Village

落合知帆*・小林正美**

Chiho Ochiai *・Masami Kobayashi**

This report discusses the analysis of roles and awareness of fire volunteers (FV) by conducting an interview survey asking their reason of joining, motivation for participating and relationship with local community. FV in Shirakawa village takes important roles since one district called Ogimachi is registered as World Heritage site. In the village, FV is not only an organization which is in charge of disaster management but also it is a place where young person who returned to the village was first accepted and make a human connection/relationship with different age groups of the community. The awareness of FVs have been kept high and changed specially by practicing for the FV competition, participating in actual fire/flood situation, and being a leader of a group to teach young members. Also, local information is shared during the daily activity and training or afterword drinking, this is a part of its tradition. In the village, maintaining FV was recognized as protecting the village.

Keywords: Fire Volunteers, Awareness Building, Local Community
消防団, 意識形成, 地域社会

1. はじめに

1.1 調査の背景と目的

近年、各地で地震や土砂災害など様々な自然災害が発生している。各地方自治体では、災害対策基本法に基づき、防災計画を策定し、災害に対する体制整備を行っている。災害対策において、阪神・淡路大震災以降、行政による対策のみならず、個人（自助）および地域社会（共助）の重要性が認識されている。しかし、就業形態の変化や少子高齢化など社会経済状況の変化によって、地域社会の防災力は低下していることが指摘されている。地域における災害対応や防災対策を担う一員である消防団に着目するとその数は、常設消防の設置や上記の社会経済状況により年々減少しており、地域の防災力をどのようにして維持、向上させていくのかが課題となっている¹⁾。一方で、後藤が指摘するように、消防団の活動実態については後世に伝えられている資料が少なく、消防団の運営や活動についての具体的な記述はほとんどなされてこなかった²⁾。このため、地域防災における消防団の役割が十分に理解・評価されてこなかったという背景がある。

伝統的建造物保存地区（以下、伝建地区）においても、その地区独自の防災体制構築のため、防災計画の策定が進められており^{注1)}、地域住民は自分の命と財産を守るために主体的な役割を果たす事が求められている。これまでの岐阜県白川村の住民や消防団員に対して実施した聞き取り調査と参与観察に関する報告では、消防団が人々の生活の基盤である合掌集落を守るため、地域の防災や安全の維持に関して主体的な役割を果たしている事を示した³⁾。また、消防団の活動実態や祭礼という地域行事における消防団の役割と地域防災力との関係を示した⁴⁾。

本報告では、伝建地区および世界遺産にも指定されている白川村荻町を管轄する白川村消防団中部分団員に対する聞き取り調査の結果から、消防団員の入団のきっかけ、消防活動に対する意識とその変化、そして消防団の役割を明らかにし、地域社会における消防団の役割とその伝統の継続について考察する。

2. 聞き取り調査

2.1 調査方法と内容

本研究の調査はまず、一年間（平成21年2月から平成22年6月）をかけて消防団の活動を参与観察し、消防団幹部に対するインタビューなど予備調査を行った。その上で、消防団員に対する半構造化面接法による聞き取り調査（平成22年10月14、15日）を行った。これは、聞き取り調査を行う前に、地域の状況を把握し、あらかじめ消防団の基礎情報（組織体制、活動や団員）を得ることと、ある程度の人間関係を構築した上で本調査を行う事で消防団員が本音で話しやすい環境作りに努め、実態をより正確にまた、具体的に把握・理解するためである。

本調査では、質問項目を、1) 入団のきっかけとその入団の経緯、2) 消防団員としての意識とその変化、3) 荻町地区を守っていくために重要な点および次世代への継承、4) 今後の荻町地区の防災および消防団にあり方とした。

聞き取り調査の対象者は、白川村消防団中部分団に所属する全団員62名のうち、25名（平成22年1月時点）と消防団OB（3名）である。次世代への継承についての情報を補完するため消防団OBを調査対象に加えた。

*正会員・京都大学地球環境学堂 助教（Graduate School of Global Environmental Studies, Kyoto University）

**正会員・京都大学地球環境学堂 教授・工博（Graduate School of Global Environmental Studies, Kyoto University）

2.2 調査結果

聞き取り調査の分析結果を以下に示す。聞き取り調査の分析は主に現役消防団員の25名を対象とする。

(1) 属性

聞き取り調査対象者の概要を表-1に示す。聞き取り調査の対象者は異なる年齢層や職位から幅広く回答を得ることを配慮しながら選定した。対象とした消防団員は職位別に、部長以上9人、班長5人、団員11人、消防団OB3人ですべて男性である。

(2) 入団のきっかけ

入団のきっかけは、25人中約9割が「当時の分団長に誘われた」ことを挙げ、半数以上が村に戻ったら消防団に入団することが「暗黙の了解」または「そういうものだと思っていた」と消防団に入団することが当たり前であるという認識が高い。一方で、消防団に入団することを「全く知らなかった」と回答したのはごく少数であった。多くの場合、村に戻る前に家族から消防団に入団することが伝えられており、村に戻った時点で分団長や副分団長などが家を訪れ「頼む」または「言いに来る」というプロセスを経て、消防団に入団している。このことから、ほとんどの団員が消防団への入団は「制服が置いてあった」というように、本人の意思よりも先に消防団側が入団を当然として準備を進めていたことをきっかけとしており、入団が強制的であったという回答があるが、団員は村に戻ることを決めた時点で既に消防団に入団するものだと入団を受け入れていた。特に、「合掌を持つ家を継ぐ長男は必ず入るように」と分団長から言われ、それを本人も既に認識し、快く承諾していることがこの地において特徴的である。

年代別に入団時の経緯や意識に着目すると、50代の団員は、消防団への入団について、「当時は誰もかれもが入れるものではなかった」、「入ってくれんかなと頼まれてうれしかった」というように、当時はまだ若者も多く、消防団はなりたいたと言てなれるものではなく、また、定住する事が確実になって数年経ってからやっと誘うというように入団の誘いも慎重であり、団員の中には選ばれし者という意識が少なからずあった事が伺える。40代から30代後半の世代は、「長男なので入るつもりだった」、「世代交代したので入った」、「一つ返事で了解した」、「同級生もいて、皆入ると言っていたので」など、消防団は村に帰れば加入するものという意識がみられた。それに対して、20代から30代前半の世代になると、「消防団に入るもんだとは全く知らなかった」や「入りたくなかったので断っていたが、村内の仕事に着いたため、断る理由が無くなった」という回答も一部であると共に、最近では断る住民もいるなど入団への意識が異なっている。

(3) 入団当初の意識と意識変化

消防団に入団後の意識変化(どのような意識をいつ、何を機会に持つようになるのか)を聞いた。入団当初は“新兵訓練”と呼ばれる行進や基礎訓練が行われ、また行事や訓練など出事が多く拘束されることから、約4割の団員が消防団活動を否定的(ネガティブ)に捉えている。または、想像していたものと同じであったか、それよりも楽しかったなど、否定的でも肯定的でもなくどちらかという受け身に捉えている。

表-1 聞き取り調査対象者の概要

No.	年齢	経験年数	職位	No.	年齢	経験年数	職位
1	56	34	分団長	15	33	15	団員
2	47	29	副分団長	16	33	15	団員
3	46	28	部長	17	32	13	団員
4	58	34	部長	18	34	12	団員
5	38	18	部長	19	34	12	団員
6	42	16	部長	20	30	11	団員
7	36	16	部長	21	32	10	団員
8	36	16	部長	22	36	8	団員
9	36	18	部長	23	43	6	団員
10	42	16	班長	24	25	6	団員
11	37	17	班長	25	32	5	団員
12	34	15	班長	26	60代		元分団長
13	34	15	班長	27	60代		元分団長
14	53	14	班長	28	50代		元部長

*職位は2010年1月現在

表-2 入団のきっかけ(複数回答)

回答	人数(%)
当時の分団長に誘われた	22(88)
暗黙の了解/そういうものだと思っていた	14(56)
強制または半強制	8(32)
父親(義父)に言われて	3(12)
全く知らなかった	3(12)

表-3 入団当初の意識(複数回答)

回答	人数(%)
「嫌だ」「面倒くさい」「大変」	9(36)
「こんなもんか」「思ったより大変じゃない」	7(28)
「訳分からず」「ただ命令されるだけ」	3(12)
回答なし	6(24)

表-4 意識変化のきっかけ(複数回答)

回答	人数(%)
操法大会に向け真剣に練習に打ち込む	11(44)
大会での優勝や入賞	8(32)
班長になって	8(32)
実際の災害経験	8(32)
練習後の打ち上げで酒を飲み話す	6(24)

このような入団当初の意識から、団員は経験を重ねることによってその意識が変化するのか、団員としての意識変化は、大きく分けて、操法訓練、班長への昇進、実務経験の3つ機会によって、勝負団および消防活動に対して肯定的または積極的な意識へと変化している。

一つ目は、操法大会での訓練や大会での優勝が大きなきっかけとなって意識が変化している。白川村では6月に実施される操法大会の2週間前から「村が操法大会一色になる」(村役場職員)というほど消防団にとって中心的な活動である。連日夜7時、仕

事が終わってから各班が練習グラウンドに集合し、練習が行われる。各班から出場する5名の「選手」が若手から選出される事が多いが、選手が練習を進めやすいように、選手以外の先輩団員達もホースを巻いたり、水槽の水を準備したり、タイムを計ったりと一緒に練習を行う。練習後は各班のポンプ車に戻り、一杯飲みながら夜中まで手帳を参考に操法の確認や他の班の操法について批評するなど語りあう事も多い。このような光景が連日繰り返される。村の大会で優勝した班は、これまでは大野郡の大会、現在では4年に一度の県大会に出場することになり、この状況がさらに1、2ヶ月続く事になる。練習期間中は高台にあるグラウンドの電気がつき、地区中が照らされるため、村の誰もが操法の練習だと分かる。白川村では「消防未亡人」という言葉があり、団員はこの操法大会に向けて、年齢の差無く長時間共に過ごす。消防機材の訓練や点検の頻度は各班によって異なるが、実質的には団員にとって操法大会への練習が最も機材に触れる機会であり、的確かつ俊敏に消火活動が出来るようになるための数少ない機会となっている。大会は、班および分団対抗のため、「やるなら優勝しよう」という意識や歴代優勝というプライドと、その伝統を守るという意識を団員達にいだかせる。団員たちは、同世代が集まり、形とタイムを競う中に、練習に真剣に取り組み勝つことに楽しみを見出している。

操法大会の取り組みに対しては、「仕事から戻ってきた時にライトを見たらゾッとしたが、そのうちライトをつける側になっていた」、「操法は中年の青春だ」という積極的な団員もいれば、「やりたくない」、「操法の意味が分からない」という消極的な意見もある。その受け取り方や取り組み方は様々だが、操法大会の練習が班内、そして分団の団結や仲間意識、先輩への感謝の気持ちの醸成の機会となっている。白川村では近年ほとんど火災が発生しておらず、火災に対する意識を高く維持し続ける事は難しい。このため、操作大会は各団員が消防活動に必要な機材を扱う技術を習得するだけでなく、災害対応および日ごろの活動に必要な団結を作る重要な役割を果たしている。

操法大会については、「操作がよくなる必要はないで、実際の状況でも皆が出来るようにする必要がある」や「操法をやっていた時は、スポーツ感覚だった。でも操法の訓練とは、万が一の時の役割で、有事の際の訓練になっていなければ意味が無い」と選手から離れて感じたという団員の意見もあった。これは、操法訓練の重要性を理解しながらも、大会に向けた訓練と実地では状況が異なるため、消防の実践力と訓練の意味を再認識する必要性を示している。

二つ目は、班長以上の半数が、班長になった事が契機となって意識が変化している。その理由としては、「自分がしっかりしていないと下の者に教えられない」と意識するようになり、班をまとめることの大変さを知り、次第に責任感を持つようになる。それと同時に消防団活動の意味を考えるようになるためである。

三つ目は、火災や洪水などの実際の災害経験である。「実際の火事場に行ってみたら、どんどん燃えてくるし、火はなかなか消えない。これが荻町内だったら大変なことになると思った」、「災害の時にどえらい目をした」など現場で過酷な災害経験を経ることで、団員は日ごろの訓練や防災への意識を高めていた。

これらに加えて、消極的な意識変化または当初からの意識に変わりが無いケースがあげられる。「面倒臭いという意識であまり変わっていない、どちらかと言うと嫌だ」、「今は店をやっているから仕事優先、やる気が無くなった。土日がつぶれる」など、消防団活動が好きではないや、観光客の増加によって土日の練習に参加しにくく負担である、また、家族との団らんに重きを置くなど、社会背景の変化から、消防団活動は義務や人間関係の観点から継続しているが、積極的ではないという実情も明らかになった。

(4) 入団しての利点

入団の利点として、ほぼ全ての団員が仲間、つながりや団結が出来たことを挙げています。具体的には、年齢や職業に関係なく知り合いができ、タテ（年齢、階級）とヨコ（同世代、異業種）のつながりが出来たことが挙げられた。回答の一例を以下に示す。

() 内は表1に対応。

- ・ 「村に戻ってきた時は親しい人はいなかった。一つのサークルみたいなもの。ざっくばらん、幅広い知り合いが出来て良かった。顔を覚えてもらったイコール大事にしてくれた。職場には無い、守ってくれる感じは消防独特」(No.2)
- ・ 「年を取ってから若い者と一緒にいれる、話せると、情報が入ってくる。若い者の心も分かる。消防のおかげで自分を知ってくれる。普通なら同じような年の人としか話さない。皆と話が出来ると、いろんなこと、人が分かる」(No.4)
- ・ 「消防に入れば、そこの人だって知ってもらえる。地元で溶け込む場所が出来る。ヨコのつながり、タテのつながりが出来、自分の仕事や他の仕事の情報も入ってくる」(No.7)
- ・ 「入っていないとつながりがあまり無いので、つながりが出来て良かった。婿に来てよりそう思う。組のつながりはあるが、より大きいつながりができる」(No.12)
- ・ 「商売をやっているとそのつながりの人しか知らない。消防団は違う職種や年齢の人と幅広く知り合いになれる。色々教えてもらえる」(No.16)
- ・ 「消防団に入ると、組の人や地域の人との関係が一変に近くなる。上の人との付き合いが出来ると、地区や組での出事の時も教えてもらいやすくなる。年上と言っても友達の親くらいしか知らないからそれがもっと広がる」(No.22)
- ・ 「十年ぶりに村に戻ってきて、消防団を通じて、帰ってきたものを受け入れて、仲間として一緒にやる。消防団が無かったら、今ほど地域と馴染んでいけてなかったと思う」(No.25)

白川村では中学卒業後に村外の高校に進学する。荻町地区は、集合集落を形成し、世帯数は138世帯(人口580人)⁵⁾である。地域内での人間関係が子供のころから形成されていると思われたが、中学生までの人間関係は家族、親戚、友人、友人の親などに限られている。村に戻って最初に入る組織が青年団と消防団であり、消防団は所属している団員の年齢層が幅広く、各世帯が属する組(ほとんどの場合、団員は自身の世帯が属する組を担当する班に配属される)よりも大きな地区単位での活動も多い。消防団は、村に戻ってきた若者の受け入れの場であり、またタテとヨコのつながりを作るという人間関係構築と情報交換の場所になっている。また、消防団に入っていることで、消防団以外の地域

表-5 荻町を守るために必要なこと (複数回答)

回答	人数(%)
自分の意識・気持ちの持ちよう	8 (32)
コミュニティ, 人との関係, 助け合い, 結	8 (32)
合掌, 故郷など守る物がある事を認識する	6 (24)
消防団, 仲間として受け入れる	6 (24)
火を出さない, 出さない雰囲気を作る	5 (20)

活動においても、「顔を覚えてもらう」、「仲良くなると教えてもらいやすくなる」など、地域住民の一員として生活する上で重要な環境を作るという役割も果たしていた。このように、消防団は災害や消火対策を担う機関であると共に、多くの団員が入団によって地域のつながりが出来た事をあげていることから、地域に入る、また受け入れてもらう、という一人の青年が地域に馴染んでいく過程における最初の重要な役割を果たしていた。加えて、これまでの調査では、消防団活動に出ることで初めて一人前と認識されることや、その後の村や地区の役職に就く際に重要な評価や信頼のベースになる事もあり、白川村では消防団は消防組織以上の役割を果たしている事が分かる。

(5) 荻町を守って行くために重要な点

今後荻町地区を守って行くために重要なことは、地域での助け合いや人間関係という共助と、自分の意識や気持ちの持ちようという自助の双方が挙げられた。当地区は、合掌家屋を中心とした観光業が地域の人口や生活の維持に不可欠であるため、皆が「火事を出せばこの村はおしまい」という認識を持っている。そのため、火の元を遵守し、火事を出さないことが第一であり、住民は常に一人ひとりが気を付けることと、消防団が活動している姿や挨拶することを通じて、火を出さない雰囲気づくりを消防団のみならず地域全体で取り組んでいる。

また、先にも述べたように、消防団は災害に対する役割以外にも村に戻ってくる青年を消防団として、また仲間として受け入れるという役割がある。個人と消防団としての双方の意識が形成されることで、荻町では消防団を継続させていくことが村を守ることであり、その重要性が認識されている。

(6) 次世代への継承と地域防災

次世代に継承したい事については、とにかく消防団に入り、先輩から引き継がれてきた活動を継続して行くことを望む意見が多い。消防団活動を通じて、用水路の位置や清掃方法など様々な村の生活や防災の情報が口伝される機会が多い、消防団に入る事で、教えてもらえる機会が出来、それが地域活動にも密接に関係している。また、消防団の活動や役割などを言葉で説明するのは難しく、経験を通じて分かることも多いという意見もあった。消防団に所属して年数が経つにつれて、地域との関わりや上に立つ大変さなどから「やらなければいけない」という意識や責任感が生まれてくる。また、「先人の知恵や努力で残されてきた合掌を守る」という意識を持つようになる。消防団OBからは、洪水での経験や合掌家屋特有の火災経験などの災害時の状況や対処法を伝えることの重要性が指摘された。

さらに、ほぼ全ての団員が今後の地域防災は、「現状維持、このまま」と回答した。中部分団の団員は、消防団が地域防災の主体となって活動する現在の状況を維持していくことを望んでいる。ただし、常備消防との連携体制の強化・向上(専門知識の共有、実地に近い訓練計画の策定と実施)、実地に近い訓練の実施(荻町の設備を踏まえた訓練の実施)、全団員が全ての消防機材の使い方を習得し、さらに地域住民も積極的に既存施設が使用できるようにすべきである、というような改善点も指摘された。

3. まとめ

本調査で得られた知見を以下にまとめる。

- ・消防団への入団は暗黙の了解または当たり前だという認識が強く、分団長に誘われるというプロセスを経て入団する
- ・入団当初は消防団活動に比較的消極的であるが、活動や経験を経て、その意識が次第に肯定的または積極的に変化する
- ・団員の意識は、操法大会に向けた練習や入賞、経験を重ねて職に就く、実際の災害を経験するという主に3つの異なる要因によって変化する
- ・当地域を守るためには、地域での助け合いである「共助」と、個人の意識としての「自助」が重要であるという認識がある
- ・荻町の消防団は、村に戻ってきた若者を受け入れる場であり、住民同士のつながりを作る場としての役割を担っている
- ・消防団は、日常的な作業や訓練といった消防活動の中で人間関係が形成され、上から下に世代を超えて情報、技術そして意識が口伝されており、今後も地域防災の主体を担う

荻町では、消防団に入ること、そして、地域の一員として消防活動を担うことが伝統となっている。荻町では消防団員それぞれが災害、特に火災に対して高い意識を持ち、そして、消防団の役割がこの地区にとっては非常に重要であるという事を強く認識している。消防団での活動を通じて、共通の意識が個人の意識となり、その個人の意識が高まる事で、また共通の意識も高まるという相乗効果を生んでいる。消防団を維持する事が、村を守ることに同様であると認識されていた。この集落が世界遺産であるのは、消防団が中心となって、地域住民の住居と生活を守ってきたからであり、消防団こそが地域の遺産であると言える。

【謝辞】

本調査において、白川村役場、白川村消防団、地域住民の方々にご協力いただきました。また、本研究は平成21年度文部科学省科学研究費補助金(基礎研究(B)19310106)「重要な建造物群保存地区の水利と市民防災力を考慮した地震火災対策に関する研究」(研究代表者大窪建之)の助成を受けて実施した。ここに記して、深く感謝の意を表します。

【注釈】

- (1) 現在白川村では荻町地区の防災計画策定を計画している。この他、多くの伝建地区において既に防災計画が策定されている。

【参考文献】

- 1) 内閣府「22年版防災白書」
- 2) 後藤一蔵「改訂国民の財産消防団—世界に類を見ない地域防災組織—近代消防社、2010年」
- 3) 浅田麻記子、落合知帆、小林正美「岐阜県白川村における地域防災活動における実態に関する研究—火の番回りと防災水利の維持管理—」日本都市計画学会都市計画報告集 No.8-1 2009年6月
- 4) 浅田麻記子、落合知帆、小林正美「岐阜県白川村における地域防災活動における実態に関する研究—消防団と女性防火クラブに着目して—」日本都市計画学会都市計画報告集 No.8-2 2009年9月
- 5) http://shirakawa-go.org/government/index.php/mura_soshiki/kyoiku/bunkazai/den.html 白川村ホームページ(平成22年10月現在)